

転生王子は TENSEIOJIHA DARAKETAI
ダラけた！ 9



朝比奈 和

Asahina Nagomu

登場人物

アルフォンス・グレスハート

グレスハート王国の皇太子。
弟フィルのことになると
周りが見えなくなる真性ブラコン。

カイル・グラバー

クールな美形少年。闇の
妖精に好かれる蠅蠅の獣人。

ヒスイ

少女の姿をした精霊。
普段は穏やかな性格
だが、怒ると怖い。

ラミア

クリティア聖教会の大司教。
妖精と同化する能力を持つ。

フィルの召喚獣たち

コクヨウ



ホタル



コハク



テンガ



ザウロ



ルリ



ランドウ



アリス

フィルの幼なじみ。
賢くて機転が利く。

フィル・グレスハート

大学生^{いちのせはると}・一ノ瀬陽翔が転生した
本編の主人公。目立たずに
ダラダラ過ごすのが夢。

1

ステア王立学校の夏季休暇。俺——フィル・グレスハートはアルフォンス兄さんと、友人のカイルとアリスと一緒に、コルトフィア王国を旅行することになった。

その道中、国境の道をリガールという鳥に阻まれ、あわや旅行中断の危機を迎えたのだが——
薬師のヒルデさんとバルサさんのところへ行った俺たちは、彼女たちからリーガルの気を鎮める特別なお香をもらい、無事コルトフィア王国に入国することができたのだった。

「国境警備の方、お香を分けてあげたら喜んでいらつしゃいましたね」
移動する馬車の中、微笑むアリスに俺は頷いた。

「お香があればリガールを刺激しないで、安全に行き来ができるようになるからね。良かったよ」
貴族の馬車はもちろんのこと、商人の馬車もより多くの物資を載せてゆつくりと通ることができ
る。

アリスの召喚獣である香鳥かおどりのノトスが、外に取り付けてある香炉を馬車の窓の縁ふちに立って覗く。

【人間の作り出すお香は素晴らしいですね。僕の棲息域にはリガールがいなかったなので、この匂いは知りませんでした。召喚獣になって良かったです。ご主人様と一緒にいろいろな所へ行き、新しい匂いを知ることができるのですから。アリスお嬢様に感謝しなくては】

香鳥の能力は匂いを作り出し、広域に拡散するというものだ。いい匂いで特定の動物をおびき寄せることも、嫌な匂いで天敵である肉食獣を遠ざけたりすることもできる。

匂いで無駄な戦闘を避ける香鳥のやり方は、リガールをお香で避ける今回の方法と似てるかもな。アリスは動物の言葉がわからないので、俺はノトスがアリスに感謝していることを通訳してあげた。アリスはノトスを自分の指に呼び寄せ、優しく頭を撫でる。

「ノトスは香りを再現できるんだよね？　ってことは、この香りも再現できるの？」

俺が尋ねると、ノトスは大きく頷いた。

【可能です。ただ、移動しながらの場合は私の能力の範囲が狭くなりますので、馬車を何台もとなると難しいと思います】

そっかあ。もしノトスが再現できるのであれば、お香がなくなっても大丈夫かと思ったが……。

王族や貴族のように、馬車数台での移動だと全てをまかなうのは難しいんだな。

「アルフォンス様。そろそろ日が傾き始めましたが、今宵は野営になるのでしょうか？」

カイルの問いに、アルフォンス兄さんは首を振った。

「いや、この先にピレッドという大きな街がある。夜には着くはずだから、その街に宿泊するよ。」

リガールのことがなければ、ピレッドではなく、さらに先の街で宿泊しようと思っていたんだけどね」

アルフォンス兄さんが少しがっかりした顔をしたので、俺は不思議に思った。

この旅は急ぐ必要もないから、基本的にゆったりとした行程が組まれている。

リガールで少し手間取りはしたが、お香がなければそこで数週間足止めされる可能性もあった。それを考えたら、順調なはずなんだけどな。

何だかピレッドに立ち寄るのが、不本意そうだ。

「ピレッドで宿泊することに、何か問題でもあるんですか？」

そう尋ねた俺に、アルフォンス兄さんは困った顔で息を吐く。

「ピレッドを治める領主が、私たちの出発を引き止めるだろうと思ってね。まあ、この先に山越えがあるから食料の調達は必須だし、結局は一日、二日はピレッドに滞在するだけ……」

「なぜ、僕たちを引き止めるんですか？」

キョトンと小首を傾げると、アルフォンス兄さんはフツと笑って俺の頭を優しく撫でた。

「領主の対応は私がするから、フィルは気にしなくていいよ。滞在している間、フィルたちは街観光でもしてくるといい」

ごまかされた。でも、アルフォンス兄さんが話さないと決めたなら、もう一回聞いても無駄だろう。

理由が気になるところではあるが、街観光という言葉も魅力的だ。

「街観光してきていいんですか？」

思わず喜んだ俺に、アルフォンス兄さんは穏やかな表情で言う。

「フィルの場合、堅苦しいのは嫌いだろうからどんな格好で出かけてもいいけど、リックたちを護衛としてつけるよ。いいかい？」

リックとエリオットはグレスハート王国から連れてきた、アルフォンス兄さん付きの近衛兵だ。

つまり、護衛付きなら、お忍びで街を観光できるということか。それはとても嬉しい。

俺はコクコクと何度も頷き、カイルやアリスと顔を見合わせて笑う。

コルトフィアに入学して、初めての街だ。ここ一年でいろいろな国の街を観光したが、それぞれに特徴があった。ピレッドはどんな街かな。今から期待に胸が膨らむ。



ピレッドの街に入ったのは、日が沈み、街を囲う門が閉まる直前だった。

貴族や王族御用達の宿屋に着くと、俺たちは軽く夕食をとってすぐに就寝した。

明けて次の日、俺とアリスとカイルは早々に朝食をすませた。

ピレッドの街を観光するためである。もちろん、服は平民服だ。

さらに、俺の髪色は珍しく、そのままだと目立ちすぎるので、帽子をかぶることにした。

アルフォンス兄さんから「可愛すぎる！」とのお墨付きをいただいた、キャスケットの帽子だ。

「できることなら、私も一緒に行きたかったよ」

残念そうにこぼすアルフォンス兄さんに、俺は口元を引きつらせて笑う。

アルフォンス兄さんは目を引く容姿だから、一緒にいるときつとお忍びにならないよなあ。

「アルフォンス兄さまは、今日はどうされるんですか？」

「私たちが街に入ったことを領主が知ったらしくてね。こちらに挨拶に来るといふから、それは断って私が領主の館へ出向くことにしたんだ」

行くと決めたわりには、気が進まなそうなのが声のトーンで伝わる。

面倒だけど、宿に來られて居座られるよりマシってことかな。アルフォンス兄さんをこんなに憂鬱にさせる領主ってどんな人なんだ。

そんな気持ちでじっと見つめていると、アルフォンス兄さんは微笑んで俺の頭を撫でた。

「街観光を楽しんでおいで。帰ってきたら私に話して聞かせてくれ」

「はい」

アルフォンス兄さんに見送られて、俺たちは部屋を後にする。

宿を出る際、宿屋の主人にお忍びで出かける旨を伝えると、裏口を教えてくださいました。

高貴な人がお忍びで出かけることはよくあるようで、そういった場合は目立たない裏口から出入

りをするらしい。

「フィル様、どこに行きましようか？」

宿屋から出て、カイルが辺りを見回しながら言う。すると、腰に剣を下げて街の剣士風の格好をしたエリオットが、自分の胸に手を当てた。

「どこに行きたいか仰おこつてくだされば、我々が案内いたしますよ。以前アルフォンス殿下にお供して、ピレッドを訪れたことがあります」

「民芸品のお店に、観光向きの建造物、名物料理も知っていますよ。卵焼きの美味しいお店がありまして……あ、今さつき朝食を召し上がったばかりでしたね」

指折り数えながら説明していたリックは、途端に眉を下げる。その情けない顔に、俺とアリスとカイルは思わず笑ってしまった。

「まずは、民芸品のお店を見よう。お昼になったら、そのおすすめのお店に行けばいいよ」

「リックさん、エリオットさん。案内よろしくお願いします」

「どうぞよろしく願います」

アリスやカイルが頭を下げると、リックとエリオットは「かしこまりました」と微笑んだ。

民芸品のお店に向かいながら、昨夜は暗くて見られなかった街の風景を見て回る。

街を囲う石造りの防壁は、厚さがあって高かった。見張り台の役目もあるのか、壁の上には兵士

の姿も見える。

この街の規模には見張りがあまりないけど、どこかで待機しているのかな。

「コルトフィアの中央から離れているのに、大きな街だね」

辺りを見回しながらそう呟くと、リックとエリオットが教えてくれる。

「コルトフィアの辺境にある街の中で、ピレッドは最も大きいんですよ」

「旅人や商人の多くはこの街を経由して、コルトフィアの中央や他国に向かいますから、重要な拠点と言ってもいいでしょう」

なるほど。王都から離れていても、交易などに利便性があれば街も栄えるってことか。

やっぱり実際に土地を訪れたほうが勉強になるな。

それからしばらくして、リックのおすすめの民芸品屋に到着した。

店内に入ると、木彫りや毛織物、動物の角で作られた民芸品が置いてある。

今までの国の品と違い、幾何学模様のモチーフが多いようだ。

「うわあ、すごいな」

「初めて見る柄がらです」

シンプルなデザインを好むカイルも、細やかな模様の見事に感嘆している。

「いらつしやい。坊ちゃんたち旅人かい？」

店主に声をかけられて、俺たちは顔いて挨拶をする。

「ステアの方から来ました。角を使った商品が多いんですね」

俺が角の形をそのまま利用した笛を手にして言うと、店主の目元に笑い皺ができた。

「コルトフィアはグラント大陸の中でも北方だから、ステアよりも雪深い地域が多いんだ。山岳にはヴィノっていう、でっかい山羊を飼育している民族がいてな。ヴィノの角が年に数回生え変わるもんで、外に出られない冬にはヴィノの毛や角で民芸品を作ってるのさ」

「へえ。ヴィノかあ」

俺の呟きを聞いて気持ちを感じたのか、アリスがクスクスと笑う。

「この旅行で会えたらいいですね」

「ヴィノに興味が出てきたかい？　なら、なおさらここで買ったほうがいい。ヴィノの民芸品は他国で人気だから、ピレッドの街に多く卸されるんだ。コルトフィアの中央より品数が多いよ」

営業スマイルで、店主のおじさんは微笑む。

なかなか口が上手い。そう言われちゃうと、購買欲をくすぐられるな。

エリオットたちを振り返ったところ、二人はコクリと頷いた。

「確かに中央よりも品数が豊富ですし、値段も安いですよ」

アリスは「それなら……」と、店内の小物をさらにじっくりと見て回る。

「私、ライラに何か買っていこうかしら」

「ライラは民芸品とか好きだからいいかもね。僕もレイたちにお土産を買おうかな」

休暇明けに、ステア王立学校の同級生であるライラやレイ、トーマ、それからシリルにお土産を渡せば、きっと喜んでくれるだろう。

「この羽根ペン立てはいかがですか？」

カイルに呼ばれて見に行くと、羽ペンを立てる小さな台に、角の一部が使われた品だった。

手軽でかさばらず、使い勝手も良さそうだ。嬉しいことにお値段も手ごろである。

「いいね。じゃあ、皆おそろいで買おうか」

自分たちの分と、レイたちの分を購入する。アリスはそれとは別に、ヴィノの毛で織られたお財布をライラに買おうらしい。

それぞれ包んでもらい、お金を払って民芸品店を出る。その頃には小腹が減ってきたので、通りの商店を覗きつつ、卵焼きのお店へと向かうことにした。

リックおすすめのお店は、街の中心の広場に面した場所にあった。大衆食堂といった雰囲気で、多くの地元民や旅人でごった返している。客席の半分がオープンテラスになっており、俺たちはテラスの隅に座ることにした。

「騒がしいところですね。でも、味は素晴らしいので！」

力強く言うリックに、俺はお客さんを見回しながら頷いた。

「これだけお客さんがいるってことは、人気ってことだよな」

「そうさ！　うちの卵焼きは何度でも食べたくなるって評判だよ！」

俺たちの話が聞こえたのか、お店のおかみさんがにっこりと笑って、テーブルの上に卵焼きの皿二枚と薄く切ったバゲットの籠かごをドンつと置く。その力強さに皿に載った卵がふるふる揺れ、籠のバゲットが跳ねた。

「おお！　美味しそう！」

特大の卵焼きだ。卵の黄身の色が濃く、オレンジ色をしている。

「たくさんおかわりして、大きくなるんだよ」

おかみさんは俺の背中を叩き、他の客が叫んだ注文に返事をして店の中に入っていた。

エリオットはおかみさんを見送ると、心配そうに囁く。

「フィル様、背中は大丈夫ですか？　あのおかみさん、気風きふうがよすぎるところがありました……」
俺はクスクスと笑って、大丈夫だと頷く。

「ああいう人、好感もてるよね」

肝きもつ玉母たまさんのような、元気なおかみさん。これぞ街の食堂だ。

きっと王子の格好をしていたらこの食堂には入れなかっただろうし、入店できたとしても皆に恐縮されてこの雰囲気は味わえなかったと思う。

やっぱり堅苦しい貴族専用のレストランより、こっちのほうが性しょうに合ってるなあ。

「では、食べましょうか」

エリオットは、ナイフとフォークで卵焼きを切り分ける。

「切るときらにいい香りがしますね」

アリスの言葉に、俺も匂いを吸い込む。切った断面が、何とも美味しそうだ。

「パンの上に卵焼きを載せて食べるのが美味しいんですよ」

リックはそう言って、見本を示すように卵焼きを載せてバゲットを食べた。

「相変わらず美味しいです。さあ、どうぞフィル様も」

幸せそうな顔ですすめられて、俺もリックと同様に卵焼きを載せたバゲットを大きな口でパクリと頬張る。

ふわふわの卵焼きは、野菜の出汁だしが香る優しい味がした。

内陸では魚が手に入らないから、出汁は野菜でとっているんだな。

味付けはシンプルに塩だけ。野菜の出汁の甘みが、バゲットに合っていて美味しい。

「もう一つ卵焼きがありますけど、こちらは同じものですか？」

カイルがまだ切り分けていないほうの卵焼きを指さすと、リックはニヤリと笑った。

「こっちはバターと砂糖を入れた甘い卵焼きだ。これも美味しいぞ！」

そう言って、皿に切り分けてくれる。

こちらは中がほんのちよつと半熟だった。とろりと溶ける卵をこぼさないように、口に運ぶ。

甘い卵焼きは食感がさらにふわふわで、食べるごとにバターの香りが鼻に抜けていった。

柔らかい食感の甘いふわとろオムレツ。バターが入っているからか、デザートのようだ。

「甘くて美味しい！ それに……いつも食べているバターと違う？」

俺が小首を傾げると、カイルもそれに同意した。

「違いますね。バターがさっぱりとして、くどくないです」

「濃厚な卵の味を邪魔していないわ」

アリスもそう評価すると、リックとエリオットが感心する。

「さすがフィル様方ですね。味覚が素晴らしい」

「これは先ほど民芸品店で話に出たヴィノのバターです」

「え！ 山羊のバター？ それにしては全然クセがないね。そういう種類の山羊なの？」

俺が驚くと、リックは得意げな顔で説明をする。

「ヴィノだから、というわけではありません。コルトフィアの高山で暮らすヴィノだけが、この味を作り出すのです」

カイルが顎に手を当てて、興味深げに卵を見つめる。

「つまり、そこで食べている牧草、もしくは環境が、このくせのないバターを作り出しているわけですね」

「へえ。ますますヴィノに会ってみたいな」

俺が甘い卵焼きを口に運びながら言うと、エリオットがニコツと口角を上げる。

「ピレッドの街に民芸品を卸しに来るがありますから、運が良ければ見ることもできるかもしれませんよ」

俺は相槌を打って、会えたらいいなと広場に視線を向ける。

その時、隣の席に三人の少女が座った。年齢は十六、十七くらい。格好や雰囲気から、この街の住人だとわかる。

注文を終えた彼女たちの話題は、宿屋の前で垣間見たらしいアルフォンス兄さんのことだった。

「麗しかったわね。グレスハートのアルフォンス皇太子殿下」

「本当ね。今夜は素敵な夢が見られそう」

「あら！ 夢でお会いしようなんて大胆ね。でも、いいわよねえ。夢の中なら、身分も関係なく口マンスを想像できるもの」

口元に手を当てて、クスクスと笑い合う。

アルフォンス兄さんは、どこに行ってもお嬢さん方に人気だ。

彼女たちは声が大きめなので自然と耳に入ってしまうのだが、兄の話題はちよつと気まずいな。

ご飯を食べたら早々に移動しよう。

俺が卵を載せたバゲットを齧ったその時、少女の一人が「ねえ、そう言えば」と友人に話しかけた。

「アルフォンス殿下のご婚姻の噂、本当かしら？」

「ルーゼリア王女様と破談寸前ってこと？」

「何っ？ 破談寸前っ!？」

「んぐっ!」

「大丈夫ですか？」

ビツクリして喉にバゲットを詰まらせかけた俺は、カイルが差し出すコップの水で流し込んだ。ど、どういうことだ。アルフォンス兄さんからは、コルトフィア王国のルーゼリア王女との関係は良好だと聞いている。

だからこそ、今回の旅行になったんだもんな。

婚姻に至らないのは、コルトフィアの準備が整っていないからだって聞いたんだけど……。

破談？ だって、申し入れはコルトフィアからだったんだよな？

幸いにも少女たちは頭を抱える俺に気づかず、そのまま話を続けている。

「ご婚約してから随分経っていらっしやるものねえ。だけど、あなた何で突然そんなこと聞くの？」

「そうよね。雲の上の方が婚約しようが、破談しようが私たちには縁がないのに」

少女二人が笑うと、話題に出した少女は首を振った。

「私じゃないわ。領主様のご息女のキャサリン様にとっては重要ってことよ。私の友達が領主様のお屋敷に勤めてるんだけど、アルフォンス殿下が以前ご滞在された時、キャサリン様が目惚れなさったそうなの」

そう言うと、聞いていた二人は相槌を打つ。

「ああ、そう言え。前回いらした時、歓迎パーティーをして滞在を随分引き延ばそうとしてたって噂で聞いたわ」

「なるほどね。それじゃあ、破談なんて聞いたなら、ますますキャサリン様がはりきっちゃいそうね。ご正室は身分的に無理でも、側室くらいにはなれるかもしれないものねえ」

そんな話でひとしきり盛り上がった彼女たちは、運ばれてきた卵焼きに歓声を上げた。

楽しいげに食事を始める少女をチラリと見た後、俺は呆然としたままリックたちに目を向ける。

リックは慌てながらも小声で説明を始めた。

「大丈夫です！ 破談寸前じゃないですよ！」

「本当に？」

俺が念を押すと、エリオットがしっかりと頷いた。

「誓って本当です。コルトフィアの森の治安情勢が落ち着かないから、準備が整わないだけなんです」

コルトフィアで、森の治安情勢？ それはまさか……。

俺とカイルは、お互いに顔を見合わせた。

「それって、もしかして森の奥に出るっていう魔獣のこと？」

俺が聞くと、エリオットは意外そうな顔をした。

「よく御存じですね。ステアにも情報が入っているんですか？」

「前に知り合った女騎士の人がコルトフィア出身で、成人の儀式をやる森にボルケノの魔獣が出たみたいなことを言っていたから……」

俺の説明に、エリオットは「なるほど」と頷く。

「その儀式をする森というのが、ちょうどこの山を越えた向こうにあるのですが、まだ退治できていないそうなんです」

「あ、ご心配なく。今回の旅行では、我々はその森の近くを通らず、迂回しながら進もうと考えておりますから。そもそも森には入れないように結界が張ってありますしね」

リックは安心させるためか明るく言うが、アリスの表情は晴れないままだ。

「結界があつても、近くに住んでいるコルトフィアの人は不安でしょうね」

確かに。俺の召喚獣のコクヨウなんか、以前ドルガドの温泉に行つた時に、クリティア聖教会の作つた結界を破つたことがあつたもんなあ。伝承の獣ディアロスであるコクヨウを基準にしたらいけないのはわかつているけど、正直ちよつと強度が心配だ。

「クリティア聖教会に依頼しているつて聞いていたから、てっきりもう退治されたのかと思つてた」

気持ちしが沈む俺に、カイルも厳しい顔で頷く。

「そうですね。その一件を知ってから半年くらいは経っていますし、コルトフィアで魔獣による大

きな被害が出たとの話も聞いていなかったなので、解決したと思つていました」

エリオットは硬い口調で、俺たちに状況を話す。

「発見当初は被害が出たみたいですが、今はほぼありません。動物はボルケノが魔獣化した時に、ほとんど別の森に逃げていきましたし、一般人も結界が張られた後は無事のようにです」

「といつても、全く影響が出ていないわけでもないんですけどね。どうやら、他の動物たちも気が立つているらしいです。先日のリガールも、魔獣のいる森から逃げてきた可能性がありますし」

肩をすくめるリックに、俺は腕組みして小さく唸った。

魔獣が近くにいと、周りの動物にも悪影響が出るらしいもんな。

ボルケノか。通常でも大きくて気性が荒い猪だが、魔獣化したら相当強くて凶暴なんだろうな。魔獣討伐を請け負っているクリティア聖教会が、手に負えないなんてよっぽどだ。

でも、そういう強敵をコクヨウは好んで倒したがるんだよね。

女騎士さんとの話はコクヨウにばれずに済んだけど、森に近づくと魔獣のことは皆の話題に上がるだろうし、そのうちコクヨウの耳に入ったりして……。

そうになったら『行つて退治する』って言い出しそう。なぜなら、あの子は暴れん坊だから。

俺たちは今まで魔獣を二匹退治してきた。コクヨウの力や俺の鉱石があれば、今回も倒せるかもしれない。だが、魔獣は種類によって能力が異なるので、そう簡単ではないとも思う。

第一、今回は王族としての旅だ。アルフォンス兄さんだって、危険なことを許してはくれないだ

ろう。

でもなあ、このままだとコルトフィアの人たちが安心できない上に、ボルケノ問題を解決しないとアルフォンス兄さんの結婚がどんどん延期されるんだよお。

俺が頭を抱えていると、エリオットたちが慰め^{なぐさ}の言葉をかける。

「大丈夫ですよ。先ほども言いましたが、危ない道は通りませんので」

「そうです。当面の心配は、この街から早く出られるかどうかです！」

グッと拳を握ったリックの言葉に、他の皆がハツとした。

そうだった。ボルケノの前にその問題があったな。

「強く断ればいいんじゃないですか？ 身分はこちらのほうが上なんですから」

そう言うカイルに、俺も再び腕組みをして強く頷いた。

「だよ。法律で決まっているわけではないけど、グレスハートの王族は代々側室を持たない方々ばかりだし。アルフォンス兄さまも一途^{いちず}な性格だから、キャサリンさんには悪いけれど見込みはないと思うんだよな」

だが、エリオットは困り顔でため息を吐く。

「正式な婚姻の申し入れなどがあれば、こちらも断れるんです。しかし、先方はまずは親密になってからと考えているのか、明確な意思表示をしてこないんですよ。婚姻の申し入れの前に断るのは、コルトフィアでは侮辱^{ぶじやく}にあたりますから、今の段階で拒否することは難しく……」

「そっか、それは困ったなあ」

皇太子ともなれば他国のしきたりを知ってしかるべき。いくら身分が違えど、先に断ってはアルフォンス兄さんに『物知らずか、礼儀知らずな皇太子』といった噂が立つてしまうというわけか。眉を寄せる俺に、リックがにつこりと笑う。

「きっとアルフォンス殿下が、上手に対応してくださいですよ。今回の旅にはフィル様がいまさらね。あのアルフォンス殿下が、フィル様を何日も放っておくはずがありません！」

……その力説もどうなのかな。

まあ、アルフォンス兄さんも自分で対処すると言っていたし、少し様子を見るか。

俺は「ふう」と息を吐いて、何気なくテラスの外の広場へ目を向けた。

すると、ちょうどその時、白とグレーの動物の一群が広場へ入ってきた。

クルクルと渦^{うず}を巻く角には見覚えがある。先ほどの民芸品店に置いてあったヴィノの角だ。

「あれって、もしかしてヴィノ？」

俺が立ち上がって聞くと、リックが大きく頷いた。

「フィル様、さすが運がいいですね。そうです。ヴィノです。食事は終わりましたから、皆で近くまで行きましょう。おかみさん！ここに勘定置いておくよ。美味しい卵焼き、また食べに来るから」

「ごちそうさまでした。美味しかったです」

俺たちがおかみさんや奥の料理人にそう言うとおかみさんたちは「またおいで」と手を振った。

ヴィノは広場の片隅にある動物用の水飲み場に、大人しく列をなしていた。数にして、十数頭はいるだろうか。

体高は八十センチくらいあって、かなり大きい。足も太くてしっかりしているので、子供どころか大人でも乗れそうだ。

全身を覆うウェーブがかった長毛は、首を境目にして頭側がグレー、体側が白色に分かれていた。ただ、顔は白く、頭の毛が前髪のようにかかって半分ほど隠れている。

「うわぁ、可愛いなあ」

会いたかったヴィノの姿に、思わず頬が緩む。

俺がヴィノを見ていると、隣でアリスが小首を傾げた。

「毛で前が隠れてますけど、見えるんでしょうか？」

すると、列の傍らで水筒の水を飲んでいた男性が、肩を揺らして笑った。

「山羊は目が横についてるからな。前が隠れてても問題ないさ。むしろ視界は広いほうだ。可愛い見えるかもしれないが、成獣のヴィノは気性が荒い。このヴィノも俺や家族以外には懐かんから、あまり近づくなよ」

片頬を上げてニヤリと笑われ、俺はがっかりする。

「そっか。毛並みが綺麗だから、撫でさせてもらいたかったのに」

すると、それを聞いたヴィノたちが俺に興味を示して近づいてきた。

【ほう、随分心地よい気を感じるな。何だ？俺たちを撫でたいのか？】

【毛並みを褒めてくれたし、別にいいぞ】

そう言って、俺の周りを囲んでくる。

「撫でさせてくれるの？ どうもありが……え？ あ、ちょ……ま……」

ヴィノたちに体や鼻先で押されて、気がつけば俺は一人、ヴィノの群れの真ん中にいた。

「おい坊主、平気か？ 気が立ってるわけじゃなさそうだが、どうなってんだこりゃ」

「ご無事ですか？」

ヴィノ遣いの男性や、カイルたちが心配そうに俺に声をかける。

「大丈夫……って、うわっ！」

俺が手を挙げて応えている途中で、数頭のヴィノが服を噛んで上に引き上げた。そうして、俺は一番大きなヴィノの背に押し上げられる。

どうやら背中に乗せてくれたらしい。

「わぁ、ふわふわで気持ちいいやー！」

ウェーブのかかった毛は、予想していたよりも柔らかかった。

【そうだろう】

俺を乗せてくれたヴィノは、少し得意げに頭を上げる。

「乗せてくれてありがとう」

俺はお礼を言いながら、ヴィノに抱きついた。その様子を見ていたヴィノ遣いが、呆然とする。

「あのヴィノが自ら背に乗せるとは……。いったい坊主……いや、坊ちゃんは何者なんだ」

「えっ！」

何者って……王子だとバレたってことじゃないよね？

ただ、ヴィノに乗ってモフっただけで、特に何もしていない。

目を瞬かせていると、リックとエリオットは戸惑った表情で言う。

「ヴィノは角や毛糸、乳製品など大きな恩恵を与えてくれるため、昔からコルトフィア国民に神の使いとして敬われているのです」

「その上、気性が荒く人に媚びない性格をしているので、何年もかけて信頼関係を築かないと、ま
ず乗せてくれません」

「え、そうなの？」

先にそういう動物だつて言っておいてよ……。思いつきり背中に乗って、モフってしまった。

いや、事前に聞いていても、ヴィノたちが俺を乗せるのを防ぐことができたかは疑問である
が……。

ヴィノ遣いの男性は、感嘆に似た息を吐いた。

「坊ちゃんすごいな。うちの村でも騎乗できる者は限られている。しかもヴィノは、悪しき心や弱
き心を見抜くとも言われていてな。狡いことを考えたり、自信を失ったりしている時は、俺だつて
近寄らせてくれないんだ」

「気持ちもわかっちゃうんですか？」

俺が驚くと、ヴィノたちは肯定するかのように「メエエ」と鳴いた。

【目を見りゃわかるんだよな。ロデルが自信をなくしてる時は、特にわかりやすい】

【そうそう。その点、お前さんはいいい目をしてるぜ】

ヴィノ遣いのおじさんは、どうやらロデルという名前らしい。

目かぁ。人間が感じることでできないものが、動物には察知できるのだろうか？

時々コクヨウたちも、俺の気持ちを察してるんじゃないかって思うことがあるもんな。

俺はありがたいの意味を込めて、周りのヴィノたちの頭を撫でる。すると、ヴィノは嬉しそうに
顔を寄せてきた。

「ヴィノたちがこんなに好意を寄せているんだ。坊ちゃんが何者かはわからんが良い子なんだな」

ロデルさんに褒められて、俺は少し照れる。

「ありがとうございます。あの、お仕事すみませんでした。僕、そろそろ降りますね」

そう言つてヴィノから降りようとしたが、周りのヴィノがそれを阻止する。

【まだ乗ったばかりだろう】

【遠慮するな。もっと乗ってなよ】

【そうだそうだ】

「え、いや、あの……」

降りなきゃと思うのに、鼻先で押してくる仕草が可愛いすぎる。でも、いつまでもこうして乗っているわけにもいかないしなあ。

ヴィノの行動に困る俺を見て、アリスがクスクスと笑う。

「まだ乗っけてもらいたいみたいですわね」

ロデルさんは信じられないといった顔で、ヴィノたちを見回す。

「あのヴィノたちが、こんなふうに関心した仕事をするなんてなあ。しかし、困った。ヴィノ遣いはヴィノの気持ちを尊重することで、恩恵を受けているんだ。ヴィノに無理強い^じはできない」

腕組みをして考え込むと、俺たちに向かって言う。

「そうだ。坊ちゃんたちに時間があるなら、もうしばらくの間ヴィノたちに付き合っ^てて散歩してもええないかな？ 少し歩けば、ヴィノたちも気が済むだろうから」

ヴィノに乗って散歩なんて滅多^{めった}にできることじゃないし、俺はいいんだけど……。

俺がエリオットたちの顔を窺^{うかが}うと、彼らは頷いた。

「街から出ないなら、かまいませんよ」

「じゃあ、お散歩しようか」

俺が言うと、ヴィノたちは嬉しげに「メエエ」と鳴いた。

そうして俺たちは、ピレッドの街をヴィノと散歩することになった。

【動物の言葉がわかる子供に出会えるとはなあ】

【俺、初めて会ったぜ】

会話の中で俺が言葉を理解しているとわかると、ヴィノたちはさらに俺のことを気に入ったようだ。

俺が乗っているヴィノは群れのリーダーらしく、俺を先頭にしてヴィノの群れとロデルさん、その後ろからカイルたちがついて来ていた。

散歩っていうより、パレードみたいになってるな。

ヴィノに乗っているからか、街の人たちは驚いた顔でこちらを見ている。

俺はキャスケットの帽子を目深^{まぶか}にかぶり、小声でヴィノに言う。

「君たちはこの国で随分すごい存在なんだね」

ヴィノは少し鼻先を上げて、得意げに言った。

【まあな。俺たちの種族は昔からずっと、この地の人間に恩恵を与えてるからな。ヴィノにまつわる迷信も多いんだぞ】

「迷信？」

【ヴィノが威嚇^{いかく}する者は悪人であるとか、ヴィノの群れが家に祝福に来れば婚姻が早まるのかな】
一つ目の迷信は、先ほど聞いた『ヴィノは悪しき心を見抜く』という話からできたものだろうが、
二つ目の話はいくら何でもあり得ないよね。

群れが来たからって、婚姻の時期が左右されるものでもないだろう。
俺は小さく笑って、後ろにいるロデルさんに話しかけた。

「噂に聞いたんですけど……。ヴィノの群れが家に祝福にくると婚姻が早まるって話、コルトフィアでは信じられているんですか？」

「ああ、皆信じているよ。実際に早まるしね」

否定されるかと思ったら、あっさり肯定されて俺は驚いた。

「ヴィノにはそんな力があるんですか？」

目を丸くするアリスに、ロデルさんは笑う。

「いやいや、それには仕掛けがあるんだよ。ヴィノの群れは目立つだろう？ 家にヴィノが来て皆が注目する中、女性の家から男性が出てくる。そうやってご近所公認の二人となれば、周りにせつつかれて婚姻が早まるってことさ」

なるほど。外堀を埋められるわけね。

「ヴィノ遣いにも依頼が入る時があるよ。どうにも相手の態度が煮え切らないから、男性が家を訪れている時にヴィノの群れを連れて来いってな」

ロデルさんが笑って肩をすくめると、リックが同情した様子を見せる。

「へえ、そんなことまで請け負うのか。大変だな」

「全部は引き受けんさ。ヴィノは人の好き嫌いが激しいからな。ヴィノが乗り気じゃないとやらんよ。というか、できない」

【当たり前だ。何で好きでもない人間に祝福を与えないといけないんだ】
リーダーのヴィノが言うのと、群れのヴィノたちも同意とばかりに鳴く。

「本当は今日、領主のところに群れを連れて来るよう頼まれたんだがな。名前を出した途端、ヴィノたちが嫌がったんで断ったんだ」

ロデルさんが苦笑すると、ヴィノたちは再び「メエメエ」鳴いて不機嫌を表す。

【領主は嫌いだ。嫌な目をしてる】

【あの娘っ子もな！ 動物だからと、俺たちを毛嫌いしてるのが丸わかりだ】
どうやら領主親子は、ヴィノたちに嫌われているらしい。

もしかして、領主親子が祝福するように頼んだのは、アルフォンス兄さんが来ているから？

「そうだとすると、ヴィノに祝福を断られて良かったかも」

ボソリと本音を呟くと、ヴィノのリーダーが俺を振り返った。

【ん？ お前も俺たちと同意見か？】